

千葉芳水編

忍術と魔術

東京進文館

忍術と魔術目次

▽忍術とどんなものか……………	(一)	▽忍び歩きの術……………	(二)
▽忍術は正義の術である……………	(二)	◇速歩きの法◇人の目を眩ます法◇特別の忍び歩きの術◇忍び泳ぎの術◇小さい蛇を大きく見せる術◇蛇や蝦蟇を懐中にして歩く術◇分身變化の術◇天狗飛切の術◇人に姿を見られない術……………	(三)
▽忍術の研究法……………	(三)	▽特種の忍び道具……………	(四)
▽忍術は立身出世の近道……………	(四)	▽遁形變化術の實例……………	(五)
▽忍術はいつ時代に起つたか……………	(五)	▽死んだ人を生かす魔法……………	(六)
▽忍術の來歴……………	(六)	▽美人の顔を真黒にする魔術……………	(七)
▽忍術の流派……………	(七)	▽水中歩行自在の妙術……………	(八)
▽忍術を行ふに必要な道具……………	(八)	▽三尺の棒を丸呑みにする奇法……………	(九)
▽忍術は必ず實行出来る……………	(九)	▽人の顔を鬼にする魔法……………	(一〇)
▽忍術の裏と表……………	(一〇)	▽幽霊と對話する術……………	(一一)
▽すぐ出来る虚實轉換法……………	(一一)	▽百里一飛の魔術……………	(一二)
▽忍術の奥儀と遠の術……………	(一二)	▽百日百夜眠りの秘法……………	(一三)
▽忍術者の極意傳……………	(一三)	▽體なくて人を縛する術……………	(一四)
▽誰にも出来る鼠の忍術……………	(一四)	▽千里眼の魔術……………	(一五)
▽人を謀る術……………	(一五)		
▽變裝術……………	(一六)		
▽忍術の名人達人となる法……………	(一七)		
▽九字の印の結び方……………	(一八)		
▽誰にも出来る飛下り飛上りの練習……………	(一九)		

【其他略す】

忍術と魔術

千葉芳水編

●忍術とはどんなものか？

忍術にんじゆつといふと昔むかしから恰あたかも魔法まほうであるかのやうに思おもつてゐるが決して魔法まほうでもなければ又不可思議ふかなものでもない。讀よんで字じの如ごとく「しのび」の術じゆつである、古來こらい武道ぶだうの極意ごくいとして一子相傳しさうでんとした忍術極意にんじゆつごくいを公開こうかいするといふ事は、文明ぶんめいの今日こんにちだから出來できるのであるがこれが戰國時代せんごくじだいでもあつたものなら著者わたくしは早速首さつそくくびが飛とんで了しまふかも知れない、それ程秘密ほどくひにした忍術にんじゆつといふものは、どんな時に利用りようされたかといふと、窮地きうちを遁のがれるか又は、敵地てきちに自由自在じいうじざいに入る時に用もちひられたものである、一口くちに分かりよく云いへば

他人に見られてはならない場合、自分の姿を隠す時、又は他人の目の前で働いて姿を隠さなければならぬ場合、或ひは他人の家へ忍び入るとか、の場合に行はれた術である。

忍術は古い昔からあつた名稱であつて別名をば隱身術、隱形術、身體隱現術とも云はれてゐる。要するに神出鬼没——隱現變化するから名附けられた名稱なのである。

●忍術は正義の術である

忍術は盜賊術と心得てゐる様な者もないとは限らないが、忍術は決して盜賊術ではないのである。一寸考へると物騒千萬な術のやうにも思はれるが、そうではなく之は正義の術であつて盜賊術は不正な術である。昔から忍術を不正な術として悪用したものに成功したものは一人も居ないのを見ても明である。例へば石川五衛門、仁木弾正などを考へても分るであらう。故に、忍術は正義の術であると云ふ事が出来るので

ある。

●忍術の研究法●

昔むかしから忍術にんじゆつは極秘ごくひ中の極秘ごくひとされて來たものであるから、それを研究けんきうするには一通とつうりの苦心くしんではなかつた。多くは公開こうかいする事の出來ない術じゆつとして封ふうするので、師弟していかその子供こどもでなければ教をしへて貰もらふ事が出來なかつた。だから今日こんにちはその正確せいかくな文書ぶんしよが残のこつて居ゐないのでその研究けんきう法ほうも中々なか／＼難むづしいのである。だが今日こんにちその實地じつちく活用くわつようは出來ないかと云いふに決けつして出來ないものではないのである。今日の様やうな文明ぶんめい開化かいくわの現代げんだいは忍術にんじゆつを科學くわがく的に説明せつめいする事が出來るのである。

宗教しゆけう、哲學てつがく、心理學しんりがく、理化學等りくわがくとうの見地けんちから考かんがへても、忍術にんじゆつは魔法まはふでなく催眠術さいみんじゆつでもなく又また全くの神秘術しんぴじゆつでもないのである。忍術にんじゆつとは物理的作用ぶつりてきさようと心理的作用しんりてきさようを適法てきはふによつて、活用くわつようする術じゆつなのである。もつと譯わかり易やすく云いへば、諸君しよくんも御承知ごしやうちの兒雷也じらいやの結印けついん

は心しん力りき集く注ちゅう法はふで、之これが心理しんり的てき作用さようなのである。煙けむりや蝦がま蟄まは補助ほじょ物ぶつであつて、それは物ぶつ理り的てき作用さようなのである。

●忍にん術じゆつは立りつ身しん出しゅつ世せの近ちか道みち

昔むかしは武ぶ士しが軍ぐん事じ上じやうの偵てい察さつや暗あん殺ぎつ等とうの場ば合あひに忍にん術じゆつを使つかつたのであるが、それを今こん日にちに應おう用ようすれば、警けい察さつ官くわんが密みつ行かうをする時とき、軍ぐん人じんが敵てきの陣ちん地ちを斥せつ候こうする場ば合あひ等とうに應おう用ようする事ことも出で来きるし、社しゃ交かう術じゆつの或ある方ほう面めん等とうにも應おう用よう出で来きるのであるから、一つは立りつ身しん出しゅつ世せの近ちか道みちとも云いへるのである。

●忍にん術じゆつは何なん時じ代だいに起おこつたか

忍にん術じゆつは何なん時じ代だいに起おこつたかといふ事ことは明めい白はくになつていないが、正しやう忍う記にんきを見みると、源げん九く郎らう義よし經つねが勇ゆう士しを撰えらんで用もちひたとあるから源げん平へい時じ代だいといふ者ものもあるが、建けん武ぶの年ねん間かんに楠のき

正成まさしげが之これを行おこなつたといふのもある。又北條氏きたほうでうぢ康やすが盗人ぬすびとに知行ちぎやうを與あたへて改あらためて召抱めしかいへて忍術にんじゆつを使つかはしたり、武田信玄たけだしんげんが盗人ぬすびとを家來けらいに採用さいようして使用しようしたとあつて何時頃いつころから始はじつたものか明白めいはくには譯わからないのであるが、昔むかしから世よの中に行いはれてゐたといふ事は確たしかなものである。

●忍術の來歴●

徳川時代とくがはじだいには、伊賀いがの國くにと近江あふみの國くにとの中なかに甲賀郡かふがぐんといふ處ところがあるが、之この土地とちのひと々ひと々は自然しぜんに忍術にんじゆつといふ技能ぎのうがあつて、人ひとの目めを晦くらましたり不意討ふいうちをしたり、密行みつかうや偵察ていさつの時ときに之この術じゆつを巧たくみに使つかつてゐたので、當時たうじにんじゆつ忍術にんじゆつを使つかふ者ものは伊賀者いがものと呼ばれてゐたのであつた。

それで徳川家とくがはけでは伊賀いがの人々ひと々を多數たすう集あつめて之この術じゆつを練習れんしゆさせて軍事ぐんじの時ときに種々應しゆく用ようしたものであるから、それが爲ために非常ひじやうに利益りえきを得たのであつた。徳川とくがはの外ほかにも忍術にんじゆつ

を使つた諸侯武家はあつたが、徳川ほど盛んではなかつたのである。

徳川家では忍術の取締法を設けてその術の公表を絶対に秘密にさせたのである。

●忍術の流派●

忍術の流派には甲賀流、伊賀流、芥川流等が最も多く用ひられた。その特長としては、伊賀流は主に鼠を用ひ、甲賀流は猫を用ひた。其他根來流、羽黒流、武田流、秋葉流等の獨創的流派もあつた。

●忍術を行ふに必要な道具●

忍術を行ふには必要な特種の道具がある。昔ならばコンナ道具の秘傳を漏せばスグに打ち首にもなるのであつた。この忍術道具の事は記洲藩忍術の達人名取青龍軒の傳書に發表されてあるから、その儘を記して見る。

あみ笠あみがさ

かぎ縄かぎなは

石筆せきひつ

薬くすり

三尺手拭てぬぐひ

打竹うちたけ

この六つである。

この六つの道具どうぐの使つかひ方は、あみ笠は顔かほをかくして形かたちを造つくりなほすものである。笠がさの内うちからは能よく他の人ひとの行動かうどうが見みえるから笠がさを撰えらんだものである。かぎ縄は高い處ところへ登のぼるのに使つかふ、或あるひは低い處ところへ下おりたり人ひとを縛はくしたりするにも使つかつたのである。石筆、は心こころ覺おほえを記しるす、薬は蟲藥むしぐすりを重おもに持もつてゐた。之は大事だいじの場合はあひに到いたつて病氣びやうき等にかゝつては困こまるからである。三尺手拭は鉢巻はちまきや頬冠ほふかむり又は、堀へいを乗のり越こへたりする時の縄なはの替かはり等とうに使つかふのである。打竹は火打ひうちの事である。夜中やちゆうに使つかつたり、放火はうくわ等とうに使つかつたりするものである。

次つぎに、着物きものの色合いろあひは茶染ちやせん、ぬめりかき、黒色くろいろ、こん花色はないろ、等とうを用もちひたのである。

●忍術にんじゆは必かならずず實行ぎやうぎ出來きる

忍術は逆も實行出来るものではないと考へてゐるかも知れないが、人が工夫した術である以上は出来なければならぬものである。忍術の堂奥を知つて、之を十分會得したならば、隱現出沒は自由自在になり、密行、偵察、虚實、轉換は何の苦もなく出来るものである。

●忍術の表と裏

忍術の表に關する實際の話を述べて見よう。

○濃州大垣藩の忍術使大森大覺は箱根の關所を通らなければならぬ事があつたが門鑑を持つてゐなかつたので忽ち忍術を以つて役人の眼を晦まして無事に通過して了つた。

○由井正雪が城中に忍び入つて殿中の模様を探ぐつたり、荒木又右衛門が一尺二寸の鐵扇の中へ身を隠したり、真田の郎黨猿飛佐助や霧隱才藏の事等は諸君が能く知つて

ある事と思ふ。

之の大森大覺が役人の眼を晦して關所を通過したり、荒木又右衛門が一尺二寸の鐵扇の中へ身を隠したりする事は之が忍術の表であつて、その裏であるところの忍術の研究をすれば、少しも不思議ではないのである。

つまり、荒木又右衛門は武術の達人であるから鐵扇を以て身構へれば、全身が寸分の斬り込む隙もなたつか爲めに賞讃した形容詞であつて、大森大覺の話も、大覺は二日二晩一睡もしないで箱根の裏路を山越えしたのであるし、又由井正雪も暗夜に乘じて、變装して雜兵と共に城中に入り込んだのである。

恁うして見ると忍術は何の苦もないものゝ様であるが、しかしこの術にも一定の秘傳があればこそ、恁うした事も出来るのである。

之の秘傳は、練習の結果必ず出来るものである。

●直ぐ出来る虚實轉換法

この虚實轉換法は、實を虚と見せ虚を實と見せて巧に一瞬間に敵の眼を晦まして逃れるものである。例へば、子供が隠れん坊をする時に『モ—イヨ』と聲をかけると同時に、その聲をかけた場所から一ち早く他の場所へ身を隠すものである。是れと同様で、存在して居ないものを存在してゐる様に見せたり思はせたりする事が之の虚實轉換法といふのである。

恚う説明して了へば、諸君も今迄には知らずに此の虚實轉換法をやつてゐた事になるのである。

●忍術の奥義五遁の術

武術の最高極意によれば忍術には木、火、土、金、水の五遁の術と、その他、人、

禽きん、獸けもの、魚うを、蟲むし、日にち、月げつ、雲くも、霧きり、雷らい、電でん、風等かぜとうの遁形とんけいの術じゆつがある。之この遁術とんじゆつといふのは支那しなから傳來てんらいした武術ぶじゆつである。

この遁術とんじゆつといふのはそれ／＼或る物體ぶつたいを利用して巧たくみに身を隠かくして遁のがれる方法ほうほうである例へば、忍術にんじゆつ者は一度呪文結印どじうもんけついんすると忽たちまちその姿すがたが消きえて見えなくなる。そして姿すがたの替かはりに、蛇へび、蝦蟇がま、蜘蛛等くもとうが現あられてゐるのが之この遁形術とんけいじゆつ（遁術）といふのである。

遁形術とんけいじゆつの説明せつめいを一つ一つして見ると、

一、木遁もくとんの術じゆつ（木きに依よつて形かたちを隠かくす法はふ。草くさによつて隠かくすのも同様である。）

二、火遁くわとんの術じゆつ（火ひを以もつて形かたちを隠かくするのである。）

三、土遁つちとんの術じゆつ（土つちによつて形かたちを隠かくす。）

四、金遁きんとんの術じゆつ（金屬きんぞくを以もつて形かたちを隠かくす。）

五、水遁すゐとんの術じゆつ（水みずを利用して形かたちを隠かくす。）

六、人遁じんとんの術じゆつ（人ひとによつて形かたちを隠かくす。）

七、禽遁きんとんの術じゆつ（鳥とりによつて形かたちを隠す。）

八、獸遁じうとんの術じゆつ（獸けものを以つて形かたちを隠す。）

九、魚遁ぎよとんの術じゆつ（魚うをを利用して形かたちを隠す。）

十、蟲遁ちうとんの術じゆつ（蟲むしを利用して形かたちを隠す。）

十一、日遁にちとんの術じゆつ（日ひを利用して形かたちを隠す。）

十二、月遁げつとんの術じゆつ（月つきを利用して形かたちを隠す。）

十三、星遁せいとんの術じゆつ（星ほしを利用して形かたちを隠す。）

十四、雲遁うんとんの術じゆつ（雲くもによつて形かたちを隠す。）

十五、霧遁むとんの術じゆつ（霧きりによつて形かたちを隠す。）

十六、雷遁らいとんの術じゆつ（雷らいによつて形かたちを隠す。）

十七、電遁でんとんの術じゆつ（電いなづまによつて形かたちを隠す。）

十八、風遁ふうとんの術じゆつ（風かぜによつて形かたちを隠す。）

●忍術者の極意傳

武術最高極意には

『術は物ほしからず腹を立てず唯一心に働いて知れ』

とあるから、諸君は之の通りに忍術の練習を怠らなければ必ず出来るのである。

●誰にも出来る鼠の忍術

先づ此の術を行ふには三匹の鼠を用意して置く、そして家中に忍び入つてから家人に眼を醒されては大變であるから、茲で鼠の忍術を行ふのであるが、忍び入る前に戸や障子の隙間から最初に一匹の鼠を放すのである。すると鼠は住み馴れない所であるし、それに今迄は懷中で窮窟をして急に廣い室内に放されたのであるから急にガタガタと騒ぎ廻る。其の時寢て居た人は鼠の物音で眼を醒したが事實鼠であるから『ウル

サイ』とか何んとか云ふ位で餘り氣にも止めないで再び寝て了ふのである。そうしたら又次ぎに一匹を前と同じ様に放す。家人が眼を醒すが又鼠であるから、寝て了ふ。かく二度迄室内を騒がせて置くともう家人は鼠であるとして油斷をするから三度目の騒がしい音が人であるとは思はないのである。茲で忍術者は悠々と目的の仕事をする事が出来るのである。忍術の極意も慙う裏を明してしまつては全く詰らないものとしか思はれないのである。

●人を謀る術●

敵を謀る術——

これは敵を謀つたり人を謀つたりする術であつて又忍込みの術であるが、忍術を研究し練習するには最も大切な術であるから再三再四熟讀して十分會得される様にするがよい。

(第一) 一人忍び

この一人忍びの術といふのは、例へば、謀らうとする人の家の前へ來てから急に腹が痛くて困るから持ち合せの應急薬を飲み度いから湯を貰ひ度いとか、又は急に小用がしたくなつたから便所を借り度いとか、お宅の庭へ誤つてまりを投げ込んだから一寸とらせて下さいとか云ふ様に、色々な機會を作つてその家の内部の模様を探る方法である。

(第二) 二人忍び

これは一人忍びの時よりは難しいのであるが、先づ二人は十分離れない様にして置いてから、謀らうとする人の家の前に來たなら、一人がドン／＼と門を叩く、すると門番は何事か知らと思ひ乍ら出て來る、それと同時に門を叩いた者は逃げ出すと門番はソレ怪しい奴だと追ひかけるその隙にもう一人が忍び込んで了ふのである。又は、一人が使ひの様に見せかけて亭主を呼んで居る間に一人が入るとか、作り喧嘩をして

入るとかが二人忍びの術なのである。

(第三) 三人忍び

これも二人忍びの時より一人殖えたといふばかりである。けれども三人の場合は、例へば、高い塀を乗り越えやうとする時には、下に二人並んで一人がその肩を踏まへて登り、一人が越えたならば残りは上から引き上げるといふ具合に、二人の場合よりも便利な事が多いのである。

然し今日はこんな忍び込みの術を用ひたならば刑法に觸れる事は云ふまでもないから練習の必要は餘りないが、只参考にまで記したのである。

● 變 裝 術

忍術者には忍術の道具が必要であると同じ様に變裝術も又必要である。左にその忍術者の特種の變裝法として傳へられてある極意を記して見やう。

一、こむ僧そう（是これはあみ笠がさをきる法はふである。）

一、出しゅつ家け（男女だんぢよを近付ちかづける法はふである。）

一、山やま伏ふし（武士ぶしを近付ちかづける法はふである。）

一、商しやう人にん（人ひとを能く近付ちかづける方はふである。）

一、ほうか師し（是これも人ひとを近付ちかづける方はふである。）

一、さるがく（是これも人ひとを近付ちかづける法はふである。）

ほうか師しといふのは放下師はうかしとも云いつて手品師てじなしを云いふのである。又またさるがくは猿樂さるがくと

も云いつて役者やくしやの事ことである、以上の變装法へんさうはふは何れも人ひとに接せつし易やすいし又また敵てきを安心あんしん油斷ゆだんさせ

るには最もつとも便利べんりな方法はうはふであつて、忍しのび込みや化はけ込こむ者ものは皆みな此この變装法へんさうはふを用もちひたので

ある。

●忍術の名人達人となる法●

忍術にんじゆつの名人めいじん或あるひは達人たつじんにならうとするには、第一だいいに精神上せいしんじやうの練磨れんまを十分ぶんぶんにしなればならない。心こころが立派りっぱでなければ忍術にんじゆつの達人たつじん名人めいじんにはなれないのである。であるから忍術にんじゆつは決して盜賊術たうぞくじゆつではないのである。

●九字の印の結び方

九字じは縦横法じゆわうはふとも云いつて、九文字もんじより成なるので九字じと云いふのである。それは、臨りん、笑しょう、鬪とう者者、皆陳烈在前ちんれつぜんぜんの九字じである。次つぎぎに呪文じゆもん、印名いんみやう、印いんの結び方むすかたの説明せつめいをしやう。

呪文 印名

臨りん 獨どく 古こ 印いん
兵へい 大だい 金きん 剛こう 輪りん 印いん
鬪とう 外がい 獅し 子し 印いん

印の結び方

左右さいうの手てを打うち一組くみの中なか指ゆびを立てた合あはす。

二手内てうちに組くみ人指ひとさしゆびを立てた、中なか指ゆびにからむ。

左右互さいうたがひに組くみて中なか指ゆびを無名指くすりゆびの交叉かうしやにからみ大指おやゆび、無名くすり

指ゆび小指こゆびを立てた合あはす。

皆・外・縛・印。
陳・内・縛・印。
烈・知・拳・印。
在・日・輪・印。
前・隱・行・印。

二手各々外へ組み合す。

十指互に内へ組み入れる。

右の四指を握り、頭指を立て、左手を以て頭指を握る。

左右の大指頭指の端をつけ、餘りの四指を開き散ずる。

左の手をうしろに握り、右の手上へ置く。

そして口に、『惡魔剛伏敵退散、七難速滅七復速生秘』と唱へて印を吹き入れてから印を解いて、中指と親指を立て、他の指を振り、刀を以て物を切り拂ふ。刀印を空中にする。之の切り方は『臨を横切り、兵と縦切りし、斯の如く、鬪者皆陳烈在前』の五横四縦に切り拂ふのである。此の印の結び方は人によつて違ふものであるが、少し練習をすれば、煙草一服吸ふ間に出来るものである。そしてこれは早くて上手に行ふのが奥傳とされてゐる。

●誰れにも出来る飛下り飛上りの練習法

この練習をするには最初は下に柔かにして怪我をしない様に蒲團を敷くとか、柔かな藁を積むとか、小砂を布くとかして高い處から飛び下りても安全にして置いて、そうしてだん／＼と高い處から轉り落ちるのである。此の飛び下り方、轉り落ち方を上手になつて置くと、高い處から飛び下りるのは勿論、不意に轉り落ちても怪我をしないで済むのである。飛び上り術の練習をするには最初麻の實を一間四方形の地面へ播いてその麻の木の生長と共にその播いた上を毎月三四十分づつ飛び越へる事を練習するのである。麻の實はだん／＼生長して遂ひには五尺以上にもなるが、毎日怠らずに飛び越への練習をして居ればその五尺になつた時も何の苦もなくやすやすと飛び越せるものである。

●忍び歩きの法

板の間を歩くには足の平をびつたりと平に付ける様にして歩く事を練習する。疊の上の時は疊の目の通り歩く事が肝要なのである。

●速歩きの法●

これは普通歩く様に前方に向つて足を運ぶのではなく、股を開いて横歩みにするものである。先づ右の足から歩き出すとして普通の直立の姿勢から、股を踏み開いた形に變へる、次ぎには左の足をグイと進めて右の足を越し、丁度ブツチガへの形にするのであるが、そうしたら又直ぐに右の足を進めるといふ風にして段々前方に歩を進めるのである、之は普通の歩き方の五歩と三步が相當する程になるものであるから普通なら一日に三十里しか行けない道を五十里も行ける譯である。

●人の目を眩ます法●

之は音を立てないで泳ぐ法である。水面に波紋を畫いても宜しいが音を立て、は何もならない。此の泳は立泳をするのである、是は練習次第で少しも音が立たなくなるものである。

●小さい蛇を大きく見せる術

小さい蛇を大きく見せるといふ事は實際は出来ない事であるが、人間の心理作用を應用して、錯覺現象を起させると小さいのも大きく見えるのである。

●蛇や蝦蟇を懷中にして歩く術

蛇や蝦蟇は中々死なないものであるから、之を片布の袋か平たいザルのやうなものに入れて持つて歩くのであつて、これが段々馴れるとしまひには入れ物はいらなくなるものである。

●分身變化の術

この術の達人には有名な筑波太郎がある。彼がこの術を行ふ時は自分の身體を二つにも三つにも分身して働くといふ事である。それ位不可思議な術なのである。けれども今日の文明開化から見れば不思議でも奇妙でもなく、先づ第一に心力集注法を以て心の統一を計つたのち輕快機敏に虚實轉換法を用ひればよいのである。即ち一人であり乍ら二人にも三人にも見せる爲め虚々實々前後左右に變化すれば宜しいのである。

●天狗飛切の術

——空中飛行術——

天狗飛切りの術と云へば何となく神秘的の様に思はれるが、分身變化の術と同じ様に極めて簡單である。今日行はれてゐる棒高飛と少しも變りはない。毎日と練習によ

つては一丈以上の高さにも五六間以上の高さにも飛び上つたり、又は飛び越えたり出来るものである。此の時の注意は、補助にする棒は折り疊みの自由になるものを携帯するのである。

●人に姿を見られない術

先づ相手に見られない様にして右手の人指指を左手を以て堅く袖の中で握り、此の中十分の一術を行へば、決して他人に自分の姿を見られないといふ自信を抱かせるのである。

呪文を唱へるとか、印を結ぶとか、巻物を咬へるとか云ふことは、術者の心を確固ならしめて、一つの迷信に基いて心氣を鑑定して自身の信念を結ぶに過ぎない一種の自己催眠術なのである。

●特種の忍び道具

忍術にんじゆつをつかふには之これに必要な六つの道具だうぐのあることは前に記まへして置おいたが、その外ほかにまた色々いろくと特種とくしゆな道具だうぐを用もちひるものである。次に其その道具だうぐの大略たいりやくを記して見みやう。

一、目潰めつぶし用具ようぐ（鶏とりの卵たまごの殻からの中なかに蕃椒粉はんしやうこと灰はいとを混ませて入いれたもの）
 二、爆裂發火用具はくれつはつくわようぐ（火藥くわやくである、即ち今日すなはのダイナマイトの類るふである）

三、五寸ごすん 是これは長ながさ八寸はつすんばかりの太ふとい釘くぎの様やうなもので、頭部とうぶの三寸さんすんはかりは糸いとで卷まいて紐ひもを付つけてある。之この紐ひもは帶おびに結むすんである。是これを五六本用意ほんよういして忍しのび込こむ時ときに堀へいや羽目はめへ斜ななめに打うち付つけて足場あしはとする。

四、用刀ようぼう 忍術者にんじゆつしやの持もつてゐる刀かたなは普通ふつうより短みぢかく中身なかみは二尺位じやくぐらゐで下さげ緒をは非常ひじやうに長ながい、これは堀等へいとうへ登のぼる時とき刀かたなを立てかけて錨つはを足場あしはとして登のぼり、登のぼつてから下緒さげをを手繰てさぐつて腰帶こしおびとする故ゆゑである。

五、新刀

忍術者が忍び込んで敵を刺す時は必ず銘刀は用ひない。大抵新刀の肉の厚い鎧通しを用ひた。そして敵を一度刺したならばそれは抜き取らずに其の儘にした。これは蘇生させない爲めである。又無銘の新刀は忍術者が何者であるか不明にする爲めである。

六、黒布

これは二尺四方位の黒布であつて姿を隠す爲めに用ひる。

七、手拭

普通のものより一尺位長い。先づ敵の家中に忍び込む時には手拭を濡らして屋根を叩き堀の屋根に手拭を密着させてそれを利用して飛上り、術によつて乗り越すのである。

八、羽織

長羽織を着る、之は物を隠す爲めと、敵に斬り込まれた時に護身用とする爲めである。

●人間が動物に變化する術

精神上の練磨が充分に出来て居れば、忍術は自然に出来るといふ事は色々述べて来た。その身を梁の上に隠したり、柱に手を觸れずに攀登つたり、忽然と現はれたり消えたりするのも不寝番を眠らせたり、嚴重の戸締りが明いたり、大蛇の術や蝦蟇の術はみな心身の練磨が十分に出来さへすれば何の困難もないのである、それであるから忍術者が目的をとげて立ち去つた後から鼠の仕事と思つてゐたのが人間の仕事であるから人間が鼠に化け込んだ様な結果になる。

それで蛇術、蝦蟇の術、蜘蛛の術等も前に述べた鼠の術と同じであるから、忍術の極意は一瞬間に於て虚實法を巧に行ふのである。

● 誰にも
分かる

遁形變化術の實例

● 金・遁・の・術・

金屬きんぞくを利用して遁術とんじゆつを行ふものである。つまり不意ふいに白刃はくじんなどを閃めかして人の驚おどろく隙すきに身を隠かくす術じゆつなどである。

●木・遁の術●

木きを利用して遁のがれる術じゆつである。之これは大木たいはくとか材木ざいもくとか家屋かおくとか小屋こや物置もの置きなどに隠かくれて遁のがれたやうな形かたちをとるのを云いふのである。この術じゆつを利用りようした昔むかしの武將ぶしやう源頼朝みなもとのよりともは石橋山いしはしやまの一戦せんに破やぶれた時ときに大木たいはくの洞窟ほらあなに遁のがれたのも、その家來けらいの吉岡鬼次郎よしかきじろうがこの木もく遁とんの術じゆつが上手じやうずであつた爲ためと云いふ事ことである。又は日本武尊やまとたけるのみこと命みことが明夷征伐めいゐせいはつの時ときに蠻賊はんぞくに火攻ひげめに逢あつたが草くさをなぎ倒たふして身みを遁のがれたのも草くさを利用りようしたものである。

●士・遁の術●

土地とちを利用りようするものである。この術じゆつは今日こんにちの戦争せんそうにも應用おうようされてゐるところの、回くは

地伏地に身を伏して敵の彈丸をさけてゐるのが昔ならば土遁の術と云ふものである。

●火遁の術●

火を利用する術である。八犬傳の犬山道節が犬川莊助の斬り込んだ太刀が倒れて石塔へ斬り着けて火花を激しく出たのを道節がその一閃の火を利用して身を隠したとあるが、これが即ち火遁の術である。此の火遁の術は虚實轉換法で誰れにも直ぐ活用が出来るものである。

例へば、暗夜に大勢の敵が自分を追ひかけて東た時に一方の暗い處に藁や薪などがあつたら、其れに火を點てそうして早くも其處を逃げ去るのである。すると火は燃え上る時は敵はその火の方に注意するのは當然である。その寸間を利用して他に隠れるのである。つまり火は虚で實は却つて注意しない方にするのである。

●水遁の術●

水遁の術は一盃の水でも巧に之れを利用して身を隠す術である。

昔この術で有名だったのは石川五右衛門の水引の術や神宮小太郎等であつたが、相馬大作と河童又助も又水遁の術を行つてゐたものである。

この術は例へば、追手の爲めに河岸へ追ひ込められた時に手頃の石を拾つて之を河の中へ投げ込んで自分はその附近の草木の間に隠れるのである。すると追手は河の中に音がしたから飛び込んだものと思つてその方ばかりを注意する。そのうちには全く見逃して了ふのである。

● 人 遁 の 術 ●

これは人を利用する法で忍術にはよく行はれる。例へば、由井正雪が城中に忍び込む時、雑兵の中に變装して混じつて見事に成功したが之れ等は人道の術である。

●禽遁の術●

昔源頼朝が富士川に陣を敷いた時、夜半になると水鳥の音に平家が驚いて破れたが、之れが鳥を利用して平家を打ち破つた禽遁の術である。

●獸遁の術●

前に色々と述べた様に獸遁の術が一番多く用ひられてゐた。伊賀流の鼠、甲賀流の猫、その他の獸を用ふる場合は随分ある。

●魚遁の術●

日本では餘り有名な人はなかつたが、之は魚を利用する術で、昔支那の國の專と云ふ人は吳の國の王様を討つべく、厨人の姿に變装して、魚腹に短劍を隠し王に近寄つ

て刺したと云ふ事がある。

● 蟲 遁 の 術 ●

蛇 の 術

蛇の術や蝦蟇の術は一番多く用ひられてあつた。蛇や蝦蟇には人がよく驚くからである。之の術を行ふものは矢張り蛇をよく飼ひ馴す必要があるし又、蛇の様に姿勢、動静を學ばなければならない。

— 蝦蟇の術 —

此の術の目的その他は蛇の術と殆ど同様である。昔兒雷也、袴垂保輔等は此の術を行つたものであつた。

— 蜘蛛の術 —

此の術も蛇、蝦蟇と同じである。昔鬼童丸は此の術者として有名であつた。

●霧・隠・の・術・

これは昔も今も戦争には用ひられてゐる。今の戦では曉の濃霧や、霧の多い日を撰んで戦争する。又忍術でもそうである、霧は先きが見えないから忍び込んだり逃げ隠れには便利である。

●雲・隠・の・術・

これは曇つた日を利用して忍び込み、逃げ隠れをする術である。

此の術で有名なのは豊臣時代の黒雲太郎、御嶽八郎などであるが、諸君も知つてゐるであらう。西遊記の孫悟空も又『キントー』雲で有名な話である。

以上簡単ではあるが、忍術の大體を終つたから、次に魔術とも云ふべき事項に移つてみよう。

●長命酒の製法●

南芎なんきう一もんめ匁、當歸たうき三もんめ匁、生地きぢわう黃四もんめ匁、人參じんじん一もんめ匁、粉草こなぐさ一もんめ匁、白節しろふしこん紺二もんめ匁、白芍はくしゃく二もんめ匁、白求はくきう二もんめ匁、五加皮かひ八もんめ匁、核桃肉くるみ四もんめ匁、小肥紅せうひこう四もんめ匁、以上いじやうの十一種しゆを絹袋きぬぶくろに入れ糯米うるちまへの酒さけ四十斤きんと混ぜてよく煮に、之れを壘びんに入れて五日かか七日かの間は土中あひだに埋うづめて置いて、それから食前しょくぜんに一合がふづゝ一回服用くわいふくようするのである。之れを長命酒ちやうめいしゆといふのである。

●勝負に必ず勝つ秘法●

奉書ほうしよ四つ切りの紙かみに、勝負服しやうぶふく當勝たうしやうの五文字ごもじを書いて、之れを常つねに懷中くわいちゆうに入れて置いて、勝負事しやうぶことの始はじまる時ときに水みづと共に書かいた紙かみを飲用ふくようするのである。不思議ふしぎに効果かうくわがあるものである。

●盗人を観破する神法●

其の年の歳徳神に供へた昆布を、黒焼にして酒にませる。之れを疑はしい者に飲ませると、若し盗んだのであつたら、忽ち兩頬が腫れ上り、唇は眞黒になつて了ふものである。

●老人を若くする妙法

不老の九味に仙糖と、丹流の二味を加へて服用するのである。必ず若くなる。

●死んだ人を生す靈法

頓死者 韭の汁を採つて、鼻の孔に吹き入れ鶏冠の血を鼻の中に注入すれば必ず蘇生する。

溺死者 ホトバギスの黒焼か、又はヤマガラの黒焼を食せるのである。

雷死者 足の裏と臍の周圍にミ、ヅを潰して塗りつけ、大聲で其の人の名を呼ぶので

ある。

縊死者 雞の尿五匁を酒と混ぜて口の中へ強く注入する。

凍死者 蕎麥粉を湯に溶かして飲ませ、そして藁火で罌丸を温めてやるのである。

難産死者 冬葵を細末にして酒にませて飲ませる。

一時死んだ人にも右の方法を用ひれば、再び生き返へるもので、其の効果は實に神祕的である。

● 一生病氣に罹らぬ妙法 ●

大晦日の夜に（正十二時）井戸水を汲み取り、明くる元日の朝正二時に身體を洗つて清めるのである。無病健全になること請合である。

● 物覚えよくなる奇法 ●

黒胡麻くろごまと自然薯じねんじょとを一ケ年間ねんかんまいにちしよく毎日食かすると必かならず物覺ものおはへがよくなるのである。

●立身出世の秘法●

逃逃逃而追追

右の七文字しちにじを毎朝奉書まいあさほうしよに百三遍べんづ、書いて、それを堅かたく信心しんじんするのである。

●美人の顔を眞黒にする魔術●

女の髪かみと爪つめを十匁程しゆめほどを絹布けんぷに包つんで二ヶ月間にんかんどう土中ちちうに埋うめて置おく。さすれば白色はくしよくに變へんじてボロ／＼となる。之これを黒燒くろやきにして粉こなにし、三日間さんかみん水みづに浸して乾かはかし、之これを酒さけに溶として其その女をんなに吞のませると忽たちまち顔かほが眞黒まつくろに變へんじて了しまふ。且たゞし、之これは外ほかに女をんなに飲のませたのでは効果かうくわがない。髪かみと爪つめを取とつた主ぬしの女をんなでなければ駄目めである。之これを元もとの美人びじんにするには、密柑みかんのやうな酢氣すけのある果物くつものを澤山たくさん食くはせると見る間まに又元またもとの顔かほになるのである。

●人を笑はせる妙法

驚^し天花^{ふくわ}、白^{はく}陽^{やう}、奇^き青^{せい}、思^{たん}散^{さん}、怙^{こん}仁^{じん}草^{さう}、有^{いう}聲^{せい}、以^い上^{じやう}六^{しゆ}種^{しゆ}の粉^{ふん}末^{まつ}を二十^{もんめ}匁^めを一^{がふ}合^{みつ}の水^{みづ}に溶^とし、之^{これ}を人^{ひと}に飲^のませると忽^{たちま}ち狂^{きやう}氣^きの樣^{やう}に笑^{わら}ひ出^だす。どうしても笑^{わら}ひは止^やまない。一^じ時^{かん}間^{かん}も二^じ時^{かん}間^{かん}も笑^{わら}ひ續^{つづ}けるが、之^{これ}に少^{せう}量^{りやう}の燒^{せふ}酎^{ちう}を飲^のませると忽^{たちま}ち笑^{わら}ひは止^やむ。

●水中火玉の奇術

樟^{しやう}腦^{のう}百^{もん}五^め十^め匁^め、硫^い黃^{わう}三^{もん}匁^め、焰^{えん}硝^{せう}五^{もん}匁^めの三^{しゆ}種^{しゆ}をフノリで練^ねつて適^{てき}當^{たう}の丸^{まる}にま^{まる}るめ、そ^それを乾^ほし、火^ひを付^つけて水^{すい}中^{ちう}に入^いれても決^{けつ}して消^きえない。水^{すい}中^{ちう}では赤^{あか}い火^ひ玉^{だま}が燃^もえて見^み事^{こと}である。

●釜や水なくして飯を炊く秘法

山中又は原野等で困る時は、地下五寸位深さの穴を堀り、米を薪に包んで中に埋めて其の上に土や草や木を積んで火を點る。どん／＼燃せば穴の中の米は立派な御飯になる。

●水中歩行自在の妙術●

六鳳草の根を細末とし花粉と共に雲雀の卵の黄味で練り、之を一日十匁づゝ四ヶ月間食べると、身體は自然に軽くなり、水上に立つても決して沈まず自由に歩く事が出来る。

●三尺の棒を丸呑にする法●

金屬類で造へた伸縮自在の懷中コップのやうなものを三尺位の棒に造へるのである。之なら、口の中に入れて天井を向けばジリジリ棒は縮んで了ふのであるが、人の

目には、恰も呑んだ様に見える。

●大刀を呑み込む奇術

之は三尺棒丸呑術と同じである。伸び縮み自由の太刀を呑むのである。

●人の顔を鬼にする魔法

周圍一里の内に神社佛閣のない地に只一つある社殿を選んで、之に九十九人の男が集つて車座となり、蠟燭に火を點けて左から右へ／＼と火を廻す。其の時一人が一言づつ、天の字の付いた熟語をいふ。例へば、甲が天地と云つて火を廻したら、乙は天氣と云つて丙に火を渡すのである。そして蠟燭の火が九十九人目の人迄消えずに廻つたなら、其の時何處からともなく天狗の笑ひ聲がする。同時に九十九人目の人の頭は見る間に鬼の顔になつて了ふ。恁ふなつた時は又一番の人から更めて地の字の付いた熟

語（地震とか地理とか）を言ひ乍ら火の消えない様に九十九人目の人迄廻すと其の人の顔は元の通りになる。

●幽霊と對話する術

「死んだ君の親に逢はせてやる」とか「君の死んだ子供と話をさせて上げる」等といつて、人を一室に入れて幽霊を現はし、之が君の親だとか、子だとか云つて話をさせて料金を取つて居る者がよくあるが、之はどうするのであるかと云へば、先づ、桔梗の色と默青々葉とを搾つて液を造り、之を顔、其の他に塗れば氣味の悪い蒼白いものになる。又白衣を着せて裾の方を卯苔と干磨の根とで煎じた汁に浸せば無色となつて少しも見えないものになる。之が即ち幽霊である。そして此の幽霊を地下室から現はれる様にして仕掛すると、迷ひ切つて居る人なら大抵聲も何も聞き取れるものでない。又室内は光線を用ひてするなら尙一層面白く出来る。

●萬年食物製造の秘法●

一名不食不死の妙術ともいふ。之は、麻の實一升を粉にし、煮た紅棗一升と混ぜて適當に丸め、之を四五日置きに一粒づゝ食べると外に何も食べなくてもよい。決してヒヨロ／＼になる事はないのである。

●百里一飛の魔術●

朱砂、黃金、雌黃、飛丹、火棗、交梨の六味を密恬糖にまぜて練り、適當に丸めて一日十夕か二十夕づゝを服用して三年間經つと、百里二百里は勿論、千里萬里でも自由自在に飛ぶ事が出来るのである。

●色を白くする奇術●

白小豆しろゆり五合がふ、滑石くわいせき一匁もんめ、白檀びやくたん一匁もんめを粉末ふんまつとして之これを水みづに溶として顔かほや身體からだを洗あらふ時は見違みちがへる様やうに色白いろしろくなるのである。又または、カラス瓜うりの根ね三匁もんめを水みづに溶として顔かほに塗ぬつてよく擦すりつけること。

● 顔を櫻色にする法

滑石くわつせき、杏仁きやうにん、澱粉でんぷんの三種しゆを混ませて蒸むし、之これに龍腦りうのうと麝香じやかうとを加くはへて鷄卵けいらんの白味しろみと和わして練ねる。之これを毎朝まいあさ顔かほに塗ぬり付つけた後あとを、石鹼せつけんで洗あらひ落おとせば二週しうかんぐらふ間位まいで奇麗きれいな櫻色さくらいろとなることフシギである。

● 身體を肥やす秘法

龍眼肉りうがんにくを一日いちにち六匁もんめを三回さんかいに分わけて吞のみ乍ながら滋養じやうに富とんだ脂肪しぼうの多おほい物ものを食たべるのである。

●身體を瘦せらす秘法

山椒の實を一日十粒づゝ服用すると如何に太つた人もだんゝ瘦せて行く。

●齒を白くする法

硫酸を稀くしたものを布に浸して齒を拭へば必ず白くなるが之は危険である最も無害で簡便なのは竹の葉を黒焼にして磨くと忽ち雪の様に白くなり、又齒牙を強くする。

●眉毛を濃くする秘法

半夏一味を粉末にして之を眉に摺りつけると濃くなる。

●皺の寄らない妙法

犢牛こうちしの生肉なにくで毎日まいにち怠らずに顔面がんめんを摩擦まさつすればどんなに年としをとつても皺しわが寄よらない。

●むし齒はの痛みを止める妙法

痛む齒いたはへケレオソートをつけると即座そくざに痛みは止とまつて了しまふものである。

●百日百夜眠ひゃくひゃくやねらぬ秘法

牡蠣かき卅もんめ夕もんめ、人參にんじん三もんめ夕もんめ、茶ちや二もんめ夕もんめを粉こなにして之これを一日いちにち一回くわいに三もんめ夕もんめづゝを三回くわいの呑み、清水しみづで時々ときとき目を洗あらつて居ゐれば百日百夜眠ひゃくひゃくやねらなくても身體からだは少しも衰弱すんじやくしない。一名めいしん神秘びひ不ふ眠術みんじゆつとも云とふのである。

●繩ひもなくて人ひとを縛しばす術

兩手りやうてを肩かたに突き込み足あしの折をりかゞみの所ところへ犇ひいと三尺棒しゃくはうを通とほすとたやすく縛しばれる。

●千里眼の魔術●

人の年齢を當てる秘法――

人の年齢を必らず百發百中當たる千里眼の様な妙術である。先づ左の様な六枚の札を造るが、之は六十歳以下の者の年齢を當てる法である。

い

一	二	九	七	五	三
二三	二二	一九	一七	一五	一三
三五	三三	三一	二九	二七	一五
四七	四五	四二	四一	三九	二五
五七	五七	五七	五三	五一	四九

ろ

四	二三	二三	七	六	五
三三	二二	二二	二〇	一五	一四
三七	三六	三六	三〇	二九	二八
四六	四五	四五	五四	五三	五二
一三	六〇	四四	三九	三八	四七

は

二三	三七	三六	三五	三四	三三
四二	四二	五一	四〇	三九	三八
四八	四八	四七	四六	四五	四四
五四	五四	五三	五二	五一	五〇
六〇	六〇	五九	五八	五七	五六

に

三	六	七	一〇	二	二
一四	一五	一八	一九	二一	二三
二六	二七	三	三一	三四	三五
三八	三九	四二	四三	四六	四七
五〇	五一	五四	五五	五九	五九

は

九	一〇	二	一二	一三	八
一四	一五	二四	二五	二六	二七
二八	二	三〇	三一	四〇	四一
四二	四二	三四	四五	四六	四七
五六	五七	五八	五九	六〇	一三

へ

一七	一八	一九	二〇	二	一六
二三	二三	二四	二五	二六	一七
二八	二九	三〇	三一	四八	四九
五〇	五一	五二	五三	五四	五五
五六	五七	五八	五九	三〇	六〇

この六枚の札を人に見せて其の人の年が札の内のどれ／＼にあるか見出たさせ、其の年のあるといふ札の右上の隅の数を加へたものが即ち其の人の年齢なのである。例へば、『私の年は二とホとへの札に書いてあるといふなら其の右上の隅の数である二とハと一六とを加へて二六となる。是が其の人の年である。是は百度でも二百度でも當たるし、又此の方法を知らない人には不思議で堪らないのである。

●千里眼の魔術

——人の思ふ數を當てる秘法——

前記の年齢を當る秘法は六十歳以下と限つてあるか、人の思ふ數を當てるには千でも萬でもない、のである。先づ相手の人の思つてゐる數に百二十五を掛けさせ、其れを更に八倍したものか即ち其の人の思つて居る數なのである。例へば、其の人が六十八といふ數を思つて居るならば、其れに百二十五を掛けさせる、すると八百五十となる。今度は自分で之に八を掛ける。すると六萬八千となる。之れが其の人の思つて居る數なのだが、茲に注意しなければならないのは、出來た數の〇三位は取り除くのである。即ち六萬八千ならば六八〇〇〇である。之の〇を三位を除いて始めて六八となる。之が相手の人の思つて居た數となるのである。計算を間違なくやれば百發百中神の様に當るものである。

●鶏に多數の卵を生ます秘法

瀉利鹽一オンスを水一グラムに溶し、此の中へ馬鈴薯を入れて煮乍ら捏ね廻す。すると餅の様になるか、之を毎日鶏に與へると卵を多數生む様になる。

●米を早く搗く新法

水に潤をした糖一合を一斗の米に入れて搗くのである。之れは普通の半時間で搗けるのである。

●新紙を古紙にする秘術

新しい紙をよく煮出した番茶に浸し、之を取り上げて一ヶ月も疊の下へ入れて置く。と随分古い紙の様になる。又ムシバミを造るには思う所へ糖水を撤くと蟻が穴を開け

るものである。

● 刃物なく竹に模様をつける新法

竹に文字なり繪なり思ふものを書いて、其の上に糊をひいて米糖を振りかけ、之を日に乾かして蜀黍の根をもつて覆ひ更に竹の皮で巻いて、蒸籠に入れて蒸せば鮮明に模様が付く。

● 竹に繪焼を現はす新法

硫酸鐵を水に溶いて、それで文字や繪を書いて火にあぶれば黒色に現はれる。又硝酸を水を入れて稀めて書けば茶褐色に字や繪が現はれて大變奇麗である。

● 芋に朝顔を咲かせる魔術

芽めの出でた芋いもを朝顔あさがはの傍そばへ植うえて、芋うもの蔓つるを切きつて置おくと、何時いつの間まにか芋いもに朝顔あさがはの花はなが咲ないてゐる。

●千里眼透視の大魔術

——神通力天眼通——

日々時間ひまじかんを定さだめて、一切さいの雜念ざつねんを除さらせ、精神せいしんの統一とういつを計はかる事ことである。無我無境むがむきやうの裡うちに入いる事ことが出來たならば忽たちまち不思議ふしぎの能力のうりよくを得えて何なんでも自由自在じゆうじざいに透視とうしが出來るものである。先づ意志いしの修養しうやう、感情かうじやうじやう上の修養しうやう、身體しんたい上の修養しうやうと、此の三ヶ條さんけうを完全くわんぜんに終をへたならば誰だれでも千里眼透視せんりがんとうしの實行じつかうは出來る。

●猫を呼び集める魔術

マタタビを多量たくさんに備そなへて置おけば猫ねこは之これを嗅かぎつけて幾百千匹いくひゃくせんも集あつつて來くる。

●鼠を呼び集める奇術

高野豆腐を焼き燻つて置けば、多數の鼠は忽ち集つて来る。

●天に怪人の姿影を出現する魔術

空のよく晴れた日に、太陽を背後にして地上に立つて瞬もしないで自分の影を三分間位見詰めてから直ちに天空を見るのである。其の時は、自分の影よりも百数十倍も大きな大怪物が現はれてゐる、之は自分の影ばかりではなく何でもいゝから其の影を見詰めてから青天を見れば必ず白色に幻映するものである。又よく晴れた月の夜も一層あり／＼と怪物が現はれるものである。之は曇つた日、或ひは曇つた夜は全々駄目である。又實物を見詰めたのも駄目である。必ず其の物の影でなければならぬ。影を見詰めて居乍ら動いても駄目、長く影を見詰めて居れば居る程幻映は鮮明に現れ

る。此の時、手を上げたり色々な形をすると怪物も又その形ち通りになつて面白いものがある。

●天に文字を現す魔術

厚紙や薄板に文字を書いて切り抜き、其の影を寫して瞬もしないでそれを見詰めて居るのである。そして二三分位経つて青天を見上げると有り／＼と文字は天に現はれて見える。字は大きければ大きい程面白い。決して見詰めて居る間に瞬をしてはいけない。

●人體より靈光を發する術

朱丹、陽砂、水栽、青散の四味を等分に混て之に恬藤の花と螢の光部を混てよく練つたのと一緒にして人の身體に付けて其の上から着物を着せて置く。そして光を出す

時に着物を脱のである、すると身體が風に觸れると忽ち光を發するのである。此の時は、身體に付けるよりも着物に付けるが宜しい、腕ならば着物の袖に塗つて光を出せる時、着物を脱いで腕だけを風に當てるとよいのである。

●飛ぶ鳥を落す魔術

此の術は昔、飛鳥誘引の大事法と唱れて、よく忍術使ひに行はれた不思議の魔術である。香精、沈明草、桂丹の三味を混ぜ之を毎日二十夕づゝ食べることに六ヶ月續ければ靈妙な神仙の能力を得て、空に飛ぶ小鳥の類ならば『エーッ』といふ掛聲一つで立處に地上へ落す事が出来る。又之を一年半も續けたならばどんな大きな鳥でも『エーッ』といふ掛聲で落す事が出来るのである『エーッ』と掛聲をする前には必らず幾度も深呼吸をしなければならぬ。

●水中の魚を地上に踊り上げる魔術

飛ぶ鳥を落すのとは少しは似て居るか、之も不思議な能力を得る爲めに、香精、桂丹、紫散、雄蓮草をよく混たものを一ヶ年間毎日食べるのである。そうすると、沼や河や海の岸に立つて、魚を陸へ踊り上げる事が出来るが、其の時、先づ息を殺して五分間海面を見詰めてから満身に力を入れ、『ウン』と右足で地を踏み鳴すのである。

●●●●●●●●●●
天國に遊ぶ魔術

——天國に遊ぶ夢——

天國とはどんな國か諸君の中にも知つて居る者はあるまいが、此處で天國といふのは諸君が空想する天國である。其の天國を夢に見るのであるか、先づ春の間に八重櫻の花を採て置いて、其れを陰平にして能く乾かして奉書三枚に包んで置く。それから十五夜の月に照した水で墨を摺つて櫻の花を包んだ一枚の奉書に、自分の空想通り、例へば『どうして天國へ行かうか、天國へ行つたならば何をして遊ぼうか』といふ事

を書いて床の下に入れ、同時に外の櫻花を包んだ二枚の奉書を新しい籠に入れて井戸の中に隠して了ふ。恁うして寢床に就けば自分が奉書に書いた通り天國で遊ぶ夢を見る事か出来るのである。愉快な事と云つてもこんな愉快な事は多くあるまい。

●墨なくして文字を書く法●

紙に明礬水で大字を書いて乾し、それに五倍子の液を塗れば墨と同じ様に鮮明に文字が現れる。

●白晝を暗夜にする魔術●

檣柘といふ木の根を能く乾かしたものと、黒尾莖といふ草を乾かしたものと一緒にしてどんく燃せば、暗煙濛々として忽ち眞の闇となり、どんな青天赫々とした白晝であつても暗夜も同然となるものである。然し此の爲めに世界中か暗闇となる事はな

いから、大い^{おほ}にやつて見て面白^{おもしろ}いものである。

●暗夜を白晝にする魔術

之^{これ}は白晝^{はくちう}を暗夜^{あんや}にするのとは全く正反對^{まつつた せいはんたい}である。亞攢草^{あひんさう}のよく／＼乾燥^{かんさう}したものに青蘇^{おもと さうてん}と草天^{さいとう}で製造^{せいぞう}した油^{あぶら}を注^そいで、之^{これ}に火^ひを點^{つけ}て燃^もせばどんな黒闇^{あんこく}でも忽ち白晝^{はくちう}の様に明^{あか}るくなる。火^ひが消^きえても尙^{なほ}一時間位^{じかんぐらゐ}は明^{あか}るいから、火^ひが消^きえると同時^{どうじ}に人^{ひと}を連れて來^きて見^みせると大喝采^{だいかつさい}を博^{はく}することは請合^{うけあい}である。

●鼠を退治する妙法

チヨロ／＼と鼠^{ねづみ}を遊^{あそ}せて置^おいて蒟蒻玉^{こんはやくだま}を出^だすと驚^{おど}いて逃^にげるばかりか、よく鼠^{ねづみ}の出^でる場所^{はしよ}へ置^おくと二度^ど出^でなくなるものである。

●風を忽ち吹かせる妖術

口笛を鳴すと、不思議に風が吹き出すが、之を偶然に吹いて来る風であへて、思ふ時に風を吹かせ様とするには、其の前夜に（眞夜中）七ヶ所の井戸水で能く戸を浄め更に七ヶ所の井戸水で硯に墨を造り、一枚の白紙を四つ折りにして、天來々鳴る風と書いて焼いた粉を懷中に入れて置く。そして翌る日になつてから思ふ時に之を撒き、以すと見る間に大風が吹き出して人間の仕事とは思はれない程である。昔魔法師は能く之を行つてゐた。

●●●●● 水を燃す奇術

水の上に樟腦を浮かして其れに火を點ると、丁度水が燃えてゐる様に見える。

●●●●● 水の流れを止める魔術

猪の膽を取つて細かくして絹布に包み、十日間位石灰水に浸して置いてから陰干

にして、日光の當らない時分に河の中へ之を投げ散らせば、流れてゐる水は不思議にも止つて了ふ。そして一時間位は水の流れは止つてゐるものである。

●百●人●力●と●な●る●秘●法●

夜遅くなつて神社の周囲にはよく蝦蟇が集まることがある。其の内の雌と雄の二匹を捕へて直に黒焼にして細粉にする。其れを冷水に溶して吞むと忽ち百人二百人に匹敵する怪力者となる。蝦蟇は白晝に捕へたのでは何んにもならない事を忘れてはいけ
ない。

● ● ●
● ● ●
● ● ●
● ● ●
● ● ●
● ● ●
● ● ●

●●手にて石を割る妙法●●

左手の二本の指で石を摘み、右手を高く上げてはげしく打ち下すと同時に左手を少し持ち上げる様になると忽ち石が割れて了ふ。此の時の右手は片布で巻いた方が宜し

●豆腐を結ぶ妙術●

豆腐を細く切つて酢に浸して置けば自由自在に結べるのである。

●卵を踊らせる奇法●

卵の兩端に穴を開けて中味を吸い取つてから小さい鱈を四五疋入れて之に水を充分つめてから穴をふさいで了ふのである。恁うすると卓上の玉子は自由に踊らせる事が出来る。

●懷中より白雲を出す魔術●

空氣の漏れない様な紙か片布の袋に煙を一杯入れて懷中に入れて置いて、そろ／＼

袋を壓とだんく煙が舞ひ登る。

●人間が幽霊となる大魔術

桔梗の花と黙言の葉とを搾つて汁を取り、之れを顔や或るいは手足に塗れば蒼白い氣味の悪いものとなる又白衣の下の方を卯苔と干磨の根を煎じた汁に浸せば無白となるから之を其の人に着せたならば全く幽霊としか見えないのである。又幽霊の出入りには、恬藤の花と螢の發光部とを交て練つた王を投げ出せば、之が大氣にふれて忽ち青い光を發するから、随分物凄い幽霊が出たり入つたりする様に見えるのである。

●人間飛行自在の魔術

朱砂、黄金、雌黄、飛丹の四味を交て五ヶ月間食べつゞけると空中を飛ぶ事が出来る。

●人を空中に眠らす妖術

空中美人の妖術

口演 今回演じまするは空中美人の妖術と申しまして此ところ御目通りの三人の少女

を空中に浮かせて眠らせるといふ頗る珍妙なる術で御座います。(と前面の踏臺に

三人の少女を登せる) 奇術師が各自に魔酔薬を嗅がせると三人は一様に眠る) 三

人とも悉く眠りましたれば是れなる棒を其の手に當てがいます。(とて長い棒を

兩手に握らせる。) さあ是から餘程危険になります。そこで是なる踏臺を取り除き

ますれば三少女は兩手の棒を力に中釣となります。(と登つてゐる踏臺を取ると三

人は何れも棒を力に空中にブラリ) さて茲にあります此の花を棒に替へて持た

すれば一本の棒で是を支へます。花を持たせるのは重力の平均を保つ爲めであります

と棒の替りに花を持たせる。於れまでは首尾よく行ひましたが是からが愈

々危険であります、各少女の持った棒を取つて了ふ。三人は片手に花を持った儘宙

にブラリとなつて何れも空中に浮いてスヤ／＼と眠つてゐる。此の時青光で赫々と少

女の周圍を照して何等の仕掛もないことを示すと見物人は一様に大喝采である。

種明し。見ては随分不思議に思はれるが、種を明せば何んでもないものである。先づ

奇術師の背後には黒幕を吊る。此の幕と奇術師の間を一尺程にして置く。黒幕の中か

らは踏臺と同じ高さにして鐵棒を出して置くのである。そこで先づ奇術師は踏臺に上

ると見せて實は此の鐵棒に少女を上せるのである。奇術師が魔酔藥を嗅せるのや、少

女がスヤ／＼と眠るのはいゝ加減に示し合せてやるのである。こゝが藝に飾りを付け

て見せる處である。又棒の代りに花を持たせるのも飾りである。

注意。三人の少女の着る物は白色の女洋服に限るし、又スカウトは餘程長い物でない

と鐵棒の見えることがある。

力ドー界の大革命

◆机上の寶！手紙上達の近道



手紙のことならなんでもわかる。便利重寶「手紙カード」これさへあれば手紙書くのに苦心はいらない。候文でも口語文でも。樂々と書ける愛の手紙でも日用文でも人に頼めぬ手紙でも心配はいらない早く求められよ。

定價 送料 共 壹圓

此の「力ドー」は字引カード。は今回新發賣のものであるが發賣早々飛ぶやうな賣行きて各方面からの評判はすばらしいものでこんな便利なものをどうか一人でも多く提供したいので品の安いことも驚くほどである。



定價 送料 共 壹圓

◆實物宣傳のため 二品組 合せて 九十錢 送料八錢

發賣所

東京市小石川區表町六七
電話東京六六八〇〇番

進文館書店

大正十六年一月七日印刷
大正十六年一月十日發行

定價六十錢
特價四十錢

編者 千葉芳水

發行人 矢澤順之助

東京市小石川區表町六七

印刷人 蛙沼織居

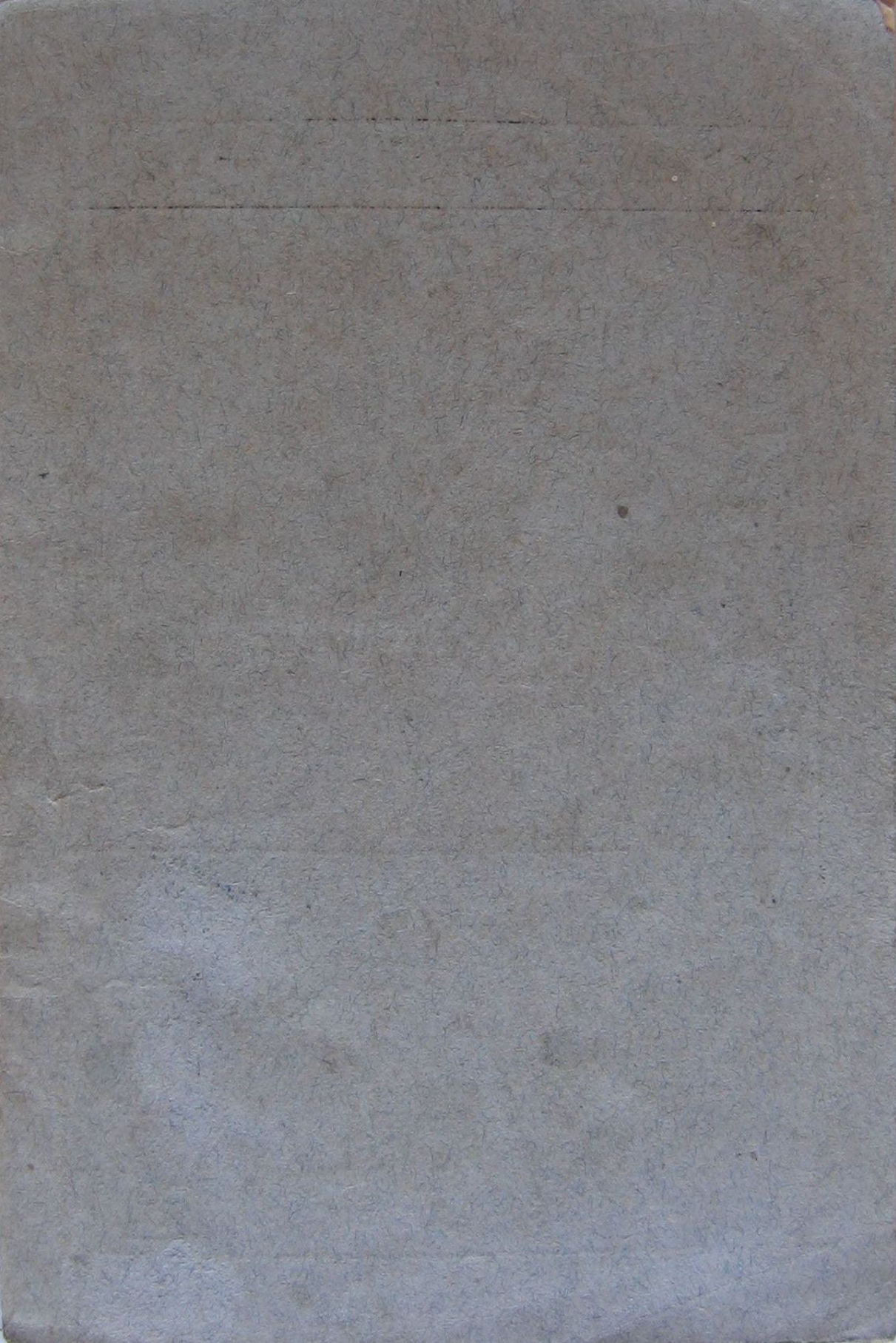
東京市小石川區表町六七

東京市小石川表町六十七號

發行所 進文館

電話東京六六八〇〇番
電話小石川四七九〇番

注意 本店の書籍は何年後でも同價で賣つてをります書店には一切ありませんから直接御註文下さい



Auteur : Hôsui (芳水) Chiba (千葉)
Titre en langue originale : 忍術 と 魔術
Titre en japonais : « Ninjutsu to majutsu »
Titre en français : « Ninjutsu et magie » / « Ninjutsu et sorcellerie »
Titre en anglais : « Ninjutsu and magic » / « Ninjutsu and sorcery »
Année : 1927

Ce petit fascicule d'environ 65 pages traite, comme son nom l'indique, du ninjutsu et de la magie.